



日本SPF豚協会だより

2018. 7
No.72

特集

日本SPF豚協会、これまでの50年、これからの50年①

成し遂げた業績をもとに、 新たなニーズやあるべき姿の分析を

日本SPF豚協会理事 全農畜産サービス(株)常務取締役 **坂口一平**



日本SPF豚協会は2019年に創立50周年を迎えます。また、SPF豚農場認定制度が発足して25周年、さらに一般社団法人として法人化されて15周年と、さまざまな意味で記念の年です。

そもそも実験動物の世界で開発されたSPF生産技術が、わが国の養豚産業に紹介されたのは1960年代に遡ります。当初は、「SPF豚は虚弱で、野外環境ではすぐ死んでしまう」という風評を立てられたり、行政の家畜衛生当局との方向性の相違等により、SPFへの一般的理解はなかなか進まなかったと聞きます。逆境の中、SPF豚生産技術の将来性に一早く着目した先人たちが1969年日本SPF豚協会（以下、「協会」と略）を組織、以来、SPF養豚への理解醸成に努めてきました。その結果、有用なワクチンや防疫資材が著しく発達した今日においても、SPF生産システムは養豚における予防衛生と生産性向上の最も基本的かつ有効な技術として認識されるに至りました。

協会はわが国におけるSPF養豚の普及を促進するため、1994年にSPF豚農場認定制度を発足させました。SPF豚生産をより確実かつ効果的に実践するため、防疫設備基準と防疫管理基準からなるSPF豚農場認定規則を制定し、SPF豚農場の認証要件を明文化したのです。さらに、SPF豚農場としてあるべき衛生検査結果や生産成績の基準値を細則として定めました。以上の認定基準に則り、協会が開催するSPF豚農場認定委員会で全ての申請農場について毎年1回以上の審査を行い、SPF認定の可否を判定する制度を確立したのです。近年、畜産において農場HACCPやGAPなどの認証制度が適用さ

れるようになりましたが、SPF豚農場認定制度はその先駆けとなったといえます。

また、協会は認定基準に農場が使用するA分類薬品費（抗菌性薬剤）の総量規制を導入しました。これは今日の「薬剤耐性とワンヘルス」問題や「安心・安全な食品」を求める消費者のニーズに協会がいち早く着目し、取り組んできたことを示します。

SPF豚農場認定制度では、各申請農場の生産成績とA分類薬品使用費を指数化した農場生産指数をもってSPF状態の評価を行います。すべての認定農場の農場生産指数をA、B、C、Dの4段階にランキング化、各農場へフィードバックし、成績最優秀農場を毎年SPF豚セミナーにおいて表彰します。このようなベンチマーキングで農場の現状認識を促し、向上意欲を高める事業も協会の重要な役割となっているのです。

さらに、協会は、イベント等への出展やSPF豚肉の試食などを通じて、消費者や販売店へSPF豚肉の認知度を高める活動を積極的に行っています。アピールの基本は、「健康に育ったSPF豚は安心で美味しい」です。

このように、協会は50年の歴史の中で、SPF豚の普及を通じて時代を先取りする取り組みを行ってきました。結果、協会SPF豚認定農場は国内養豚生産の約10%を占めるに至りました。業界において確固たる地位を保つシェアといえます。今後はこれまでの実績を顧みると同時に、養豚産業における新たなニーズや、SPF豚認定農場の立ち位置を改めて分析し、協会のあるべき姿を検討することがもっとも重要ではないかと考えます。

事業計画案など全議案を承認、 創立 50 周年記念事業への取り組み方も検討 今年度の定時総会を開催

●平成 29 年度事業経過報告

養豚を取り巻く環境は、枝肉相場が2月末から急落したものの、年度平均では前年比 33 円高の 561 円で、4 年連続で 500 円台となり、経営面での強力な後押しとなりました。また、PEDは散発的な発生が見られ、気を抜くわけにはいかないようです。

農場HACCPの普及推進事業については、農場HACCP推進農場の指定が養豚関係では、3月現在 42 農場（内SPF豚認定農場 11 農場）、農場HACCP認証農場の指定は 74 農場（同 13 農場）となっています。

協会は 29 年度も SPF豚農場認定制度を柱として各事業に取り組みました。認定農場数は 184 農場（GGP、GP 19 農場、CM 165 農場）と微増ながら、飼養母豚数は 77,604 頭で、1,805 頭（2.3%）減少しました。農場数は実態に合わせた集計方法による変化（サイトごとにカウント）で、飼養頭数の減少は火災や農場新設中などを理由とした認定休止や飼養頭数減によるものです。

また、5年に1度のCM認定農場防疫設備の見直しを1年間かけて実施、認定委員会で検討いたしました。年4回の正規認定委員会のほか、臨時認定委員会、細則整備のための検討会も開催し、平成 28 年に改正された認定規則に即した細則の整備も内容を精査しつつ検討を進めました。

CM農場の生産成績は、一貫経営農場では1母豚当たり年間出荷頭数が 22.5 頭（前年度 22.1 頭：全国平均 19 頭強）と 0.4 頭増加、A薬品費（抗菌性物質）は 220 円（全国平均は 800 円強）で前年度より 11 円増加、農場要求率は 3.18（前年度 3.21）でした。繁殖専門農場（繁殖-II）では1母豚あたり年間出荷子豚頭数が 23.4 頭（同 23.7 頭）で 0.3 頭減少、A薬品費は 129 円で 13 円増加しました。肥育専門農場（肥育-II）はA薬品費が 136 円で 2 円増加しました。

国を挙げて取り組んでいる薬剤耐性対策（AMR）に

おいても関連会議やシンポジウムに参加、普及啓発活動取り組み事例報告等の応募をはじめ推進に協力しました。その他動物福祉（AW）やJGAP関連、口蹄疫等防疫対策強化推進の会議等にも積極的に参加いたしました。ピラミッド会議は 8 月と 2 月の 2 回、他に役員会を 4 回開催し、各事業推進のための協議を重ねました。

SPF豚の普及促進活動としては、例年同様「ちくさんフードフェア」に出展しました。天候に恵まれ 2 日間で 11 万 7 千人の来場者がありました。また、千葉県認定農場にご協力を仰ぎ、千葉縣市川市「市川子ども食堂ネットワーク」に豚肉等の食材を提供いただきました。

11 月には SPF豚セミナーを開催し、130 名の参加をいただきました。

協会だよりは、予定通り 67 号、68 号、69 号、70 号を発行いたしました。69 号からは誌面刷新いたしました。また、協会ホームページリニューアルにも着手いたしました。

協会オリジナルキャップとTシャツの販売、およびポークリーフレットの配布も継続しています。

●平成 30 年度事業計画

◎協会創立 50 周年記念事業の準備と行事の検討

協会は来年秋、創立 50 周年、設立（法人化）15 周年を迎えます。昨年度より立ち上げた準備委員会を中心に、記念セミナーの開催（2019 年 9 月を予定）、記念刊行物の発行等記念事業の準備を進めます。また協賛金等事業資金についても具体的に検討していきます。

◎広報活動の充実

協会だよりは例年同様 4 回（4 月、7 月、10 月、1 月）発行し、読者に役立つ情報誌となるよう内容を充実させます。また、ホームページリニューアルを完成させ、SNSを活用した会員相互の情報交換のツールとして活用し、SPF養豚に対する正しい知識、生産・販売情報など、内外への情報発信を強化します。

6月14日(木)午後、東京都千代田区のKKRホテル東京において、平成30年度協会定時総会(代議員会)が開催されました。全代議員の出席のもと(委任状含む)、29年度事業経過報告、同決算および監査報告、30年度事業計画、予算案など協議、すべての議案が承認されました。来年に控える協会創立50周年記念事業の推進のための資金確保のための方策についても検討いたしました。概要は以下の通りです(会員の皆様には議案および議事録をお送りいたしました)。

◎SPF豚農場認定規則細則の整備

現在進めている各基準や現細則の精査をさらに進めて、改正認定規則と整合性のある細則案を整備します。

◎認定委員会の開催、農場の防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

年4回(6月、9月、12月、3月)のSPF豚農場認定委員会を開催し、認定規則の厳正な運用を行います。

◎認定成績集計結果のフィードバック

SPF豚農場認定申請の際に提出されるCM農場の生産成績を集計して、認定証発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックします。ベンチマーキングに活用して農場成績の改善に役立ててもらいます。また、現行の生産成績のグループ区分(4段階の相対評価)について、絶対値による評価を含む見直しを検討します。

◎生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

引き続き、総合生産成績および商品化頭数について最も優れた成績を収めた農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。新たな表彰の対象項目についても検討を加えていきます。また、この14年間で12回以上、成績上位25%(Aグループ)に入った農場には、認定証にその旨の優秀マーク(Aマーク)を貼付します(今年度の対象農場数は14農場)。対象農場の選定方法、選定数等については、毎年検討します。

◎薬剤耐性(AMR)対策、AW対策などの検討

農水省からの協力要請を受け、引き続きAMR対策、JGAPの取り組み、AWを考慮した実験用家畜ブタ生産農場の認証等、ピラミッドを通じて認定農場の実態を把握し、情報提供します。

◎ピラミッド会議の開催

円滑な事業推進のため、ピラミッド会議を開催します。

◎SPF豚セミナーの開催

今年度も引き続きセミナーを実施します。11月、KKRホテル東京での開催を予定しています。テーマ等について

は、ピラミッド会議で検討します。

◎地域研修会と技術懇談会の開催

開催地域、開催時期、テーマ等をピラミッド会議等で検討していきます。

◎販促用資材の制作と普及

店頭用ポークリーフレット、協会パンフレットを引き続き希望会員に無料で配布します。また、認定マークの積極的な活用を会員に働きかけます。

◎SPFポークの普及と正しい理解のための情報提供

全会員と協力して、様々な機会をとらえ、SPF養豚の仕組みと生産情報がわかるような「SPFポークに関する知識の普及」に努めます。

また、「無菌豚」「レアでも大丈夫」といった誤解を生む表現の撤廃、注意喚起を促し、一般消費者の正しい理解のための情報提供に取り組みます。

・イベントへの参加

10月開催の日本食肉流通センター主催の「ちくさんフードフェア」に参加するほか、地方で開催されるイベントに参画できないか検討します。また、千葉県SPF豚認定農場と協力、こども食堂へのSPFポーク提供を継続していきます。他地域のこども食堂への横展開も検討していきます。各地のSPF豚認定農場と協力して、幼稚園や保育園、調理学校などを対象にした試食会やバーベキューの開催を検討します。

・SPF豚資材の制作と展示

SPF豚の特徴についてのパネルやダンボールアイソレーター、保育室、認定農場等のジオラマなど、SPF豚をわかりやすく紹介する資材の作成を検討します。

◎収支健全化に向け増収案と経費削減の検討

事業推進のための増収策として、昨年度より取り組んでいる賛助会員の拡大について引き続き関係各所に働きかけ、また個人格の賛助会員の拡大にも取り組む一方、経費削減にも努力し、協会収支の安定化を図ります。

豚パルボウイルス病とは

豚パルボウイルス病は、豚パルボウイルス (Porcine parvovirus : PPV) の感染に起因する妊娠豚の繁殖障害です。本病は 1967 年にイギリスで初めて報告され、日本では 1970 年に PPV が豚の死産例から分離されています。本病は監視伝染病に指定されていないため、最近の状況については不明な部分も多いですが、九州・沖縄における 2008 年 4 月～ 2018 年 3 月の本病の発生は 2016 年の 1 例のみであることを考慮すると、日本国内における近年の発生は散発的なものにとどまっていると推察されます。その一方で、本病の原因となる PPV は日本を含む世界中に広く分布すると考えられています。よって本病は、前号で紹介した豚の日本脳炎同様、軽視すべきではありません。

原因ウイルスおよび病態

本病の原因となる PPV は、豚の口や鼻から感染し、感染豚の鼻汁、だ液、糞便および精液中に排出されます。PPV が排出される期間は感染後 2 週間と比較的短いですが、PPV は通常の消毒薬や飼育温度では容易に不活化されず、環境中で長期間生存します。よって、多くの養豚施設に PPV が存在し、その感染は年間を通じて起こると考えられています。一方、自然感染を受けた豚では、免疫が長期間持続し、終生免疫状態が続くと考えられています。問題となるのは、免疫を持たない繁殖豚が妊娠中に PPV に感染した場合です。その場合、分娩予定日あるいはその前後数日

内に異常子を娩出することがあります。妊娠中に PPV に感染した繁殖豚における異常子発生率は、日本では分娩された子豚の約 10% と推定されていますが、妊娠時期によってその発生率は異なり、妊娠中期の感染では約 30% に及びます。異常子にはミイラ化胎子、黒子、白子が混在することがあり、虚弱子が含まれることもあります。また、妊娠初期の感染の場合、骨形成以前に死んだ胎子は子宮内で吸収されるため、産子数減少などの異常がみられます。一方で、流産を起こすことはほとんどなく、繁殖障害以外の症状を示すこともまずありません。日本脳炎にみられるような新生子豚の神経症状や、雄種豚の繁殖障害も本病では起こりません。



前述の所見が認められ、初産豚に発生が多く、ほかに疑わしい感染症がない場合には本病を疑うことができますが、確定診断にはウイルス学的、血清学的、病理学的検査が必要となります。胎齢 70 日 (体長約 16 cm) 未満の異常子では、PPV の存在を調べます (臓器材料を用いたウイルス抗原やウイルス遺伝子の検出、ウイルスの分離)。また、胎齢 70 日以上 of 異常子では、PPV の存在に加えて、胎子が産生した PPV に対する抗体を調べます。抗体検査には、血清あるいは腹水、胸水などの体液を使用します。いずれの検査でも、なるべく新鮮な胎子を検査に用いることが望ましいです。類症鑑別が必要なウイルス性疾患としては、日本脳炎、オーエスキー病、豚繁殖・呼吸障害症候群 (PRRS) が挙げられます。

ブタのウイルス病

連載 No.17

豚パルボウイルス病



農研機構動物衛生研究部門
越境性感染症研究領域
暖地疾病防除ユニット (九州研究拠点)
主任研究員 白藤浩明



生ワクチンと不活化ワクチンが市販されています。本病を予防するためには、PPV に対する抗体を持たない繁殖豚に対して、種付け 1 か月前までにワクチン接種を行います。特に、未経産豚に対してはワクチン接種を行うことが望ましいです。また、前述のように、多くの農場に PPV が存在すると考えられる一方で、PPV に対する抗体を持たない経産豚が存在することがあります。よって、ワクチン接種による本病の効果的な予防のためにも、定期的な抗体検査により豚群の抗体保有率を把握することが望ましいです。

連載

種豚の能力を最大限発揮させるための飼養管理、栄養管理のポイント

繁殖成績を引き出すための 若雌、種豚管理

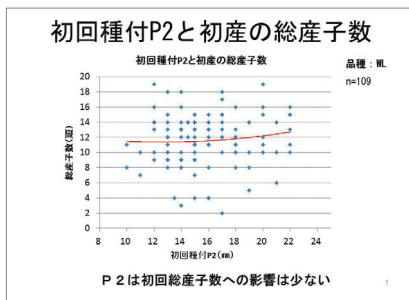


中部飼料(株)研究技術部養豚グループ 石川靖之

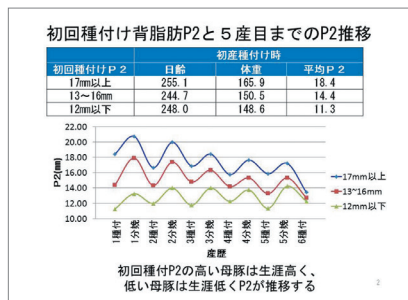
種豚の能力を引き出すことをテーマに、前号では若雌育成管理の中で、日齢や体重、増体について述べました。今回はボディーコンディション、特に背脂肪厚P2と繁殖との関係についてです。弊社実験農場で若雌育成期から生涯を通じて母豚の背脂肪P2を調査したところ、初回種付け時背脂肪P2と初回分娩総産子数との間に関連性は少なく、背脂肪P2の値は前回紹介した初回種付け日齢や体重のように影響しないようです(図1)。しかし、生涯成績について調べてみるとそうではありません。初回種付けから5産目までの母豚背脂肪P2推移を調べた結果では、初回種付け時に背脂肪P2 17mm以上の太ったグループと13~16mm以内の中層なグループ、12mm以下の痩せているグループを比較すると、初回種付け時背脂肪P2が高い(太い)豚は生涯を通じて背脂肪P2は高く推移し、逆に低い豚は生涯を通じて低く推移する傾向にあることがわかりました(図2)。つまり、太るのも痩せるのも育成期の発育に影響しており、育成期間中の脂肪蓄積がその後の母豚のボディーコンディションに大きく関わってくるわかりました。また、痩せているグループ以外の2グループについては産歴を経ているにつれて背脂肪P2の値は下がっていく傾向もみられ、初回分娩に向けての育成期の栄養蓄積が生涯を通じて重要であることがわかりました。では痩せたり、太ったりしているとどんな影響があるのでしょうか？

まず痩せている場合ですが、弊社で調査した結果では初回種付け時13~16mmの母豚よりも離乳成績が劣る傾向にあります。また、痩せた身体を回復するために妊娠期用飼料が余分に必要になることや、肢蹄の事故発生が多い傾向にありました。次に太っている母豚についてですが、授乳中の背脂肪P2の減少幅が13~16mmのグループや、12mm以下のグループよりも大きい傾向にあります(図3)。つまり授乳中に他のグループよりも激しく痩せるということです。この痩せる要因として、太ったことによる授乳期間中の飼料摂取低下や、管理者がボディーコンディションを調整するために過度に給餌制限している可能性があります。この結果として起こる飼料摂取不足は離乳後の発情再帰に影響し、弊社での調査結果では発情再帰日数が約1日延びる傾向にありました。また、発情再帰日数が延びる母豚は次産の総産子数が減少する傾向にある事もわかりました(図4)。この事は海外でも報告されており、分娩時の背脂肪P2が21mm以上と高い(太い)母豚は17~21mmの背脂肪P2の母豚よりも飼料摂取量が下がり、同様に次産の総産子数が減る傾向にあります(図5)。

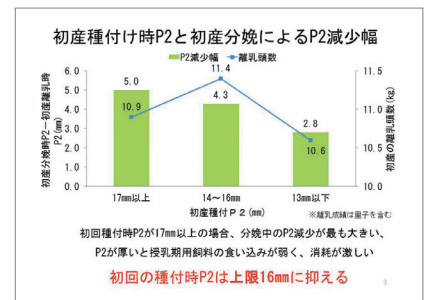
以上の事から生涯繁殖成績を改善するためには、若雌育成期での適正な脂肪蓄積が必要であり、増体重をコントロールすると共に、若雌育成期から初回分娩までに適正なボディーコンディションに整えるが生涯繁殖成績にとって重要なのです。



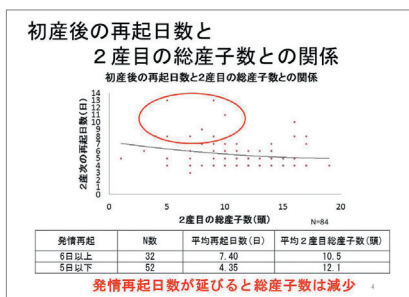
▲図1



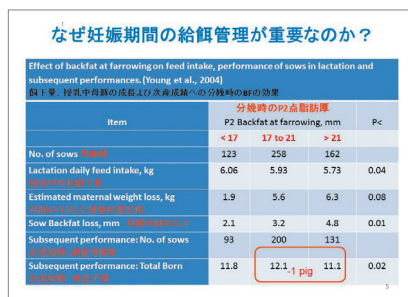
▲図2



▲図3



▲図4



▲図5

紹介・SPFのお店②

ひこま豚食堂・精肉店 Boo deli

北海道札幌市清田区美しが丘3条1丁目7-12

TEL.011-802-5141 FAX.011-802-5142 <http://www.hikomabuta.com/>

久々にご紹介するSPFポーク専門店は北海道の認定農場・(有)道南アグロ直営の札幌市「ひこま豚食堂・精肉店 Boo deli」です。農場のある森町の「ひこま豚食堂&ファーマーズショップ」(協会だより56号掲載)に次ぐ2号店で、札幌市郊外の住宅地にあります。

オープンは2016年3月。店内は対面の精肉販売コーナーの他、手作り惣菜、加工品やコラボ商品が所狭しと並び、奥には10席のイートインコーナーがあります。

店内メニューやお惣菜はすべて店内キッチンで手作り。社員、パート・アルバイトあわせて11名のスタッフは全員20代から40代の女性。店内の看板、ポップ等も手作り、プロ顔負けの出来栄えでおしゃれな雰囲気です。

宣伝は一切なしでスタートした当初から行列ができる盛況ぶり。特に、イートインが順調で常に満席状態が

続くほど。精肉・惣菜とイートインでほぼ5対5の売上げだそうです。イートインの一番人気は「オーダーカットステーキ御膳」。精肉コーナーで好きな部位・グラム数・味付けをチョイス、肉代プラス500円でサラダ、ごはん、味噌汁が付きます。精肉コーナーもブロック肉のまま陳列、注文に応じてカットすることで効率的で鮮度を保ちます。対面販売ならではの強みです。お惣菜も好評で、昼過ぎにはなくなることも。

水野奈緒子マネージャーは、オープン当初からのスタッフ。「忙しくて大変ですが、お客さんがおいしいと言ってくれるのが一番うれしいです」。

2年後には店舗拡大のための移転も決まったそうです。「町のお肉屋さんとデパ地下の中間をイメージ」(社長の日浅順一さん)という Boo deli、今後がますます楽しみです。



▲ 水野奈緒子マネージャー(右から2人目)とスタッフの皆さん



協会からのお知らせ

● 代議員・理事の交代

関東地区選出代議員の高木敏行氏(有)東海ファーム)が辞任、後任に高橋秀樹氏(有)ピギー・ジョイ)が就任いたしました。また全農畜産サービスピラミッドの代議員および理事が種田貴至氏から坂口一平氏に交代いたしました。

● 認定委員の交代

ピラミッド選出認定委員のうち、シムコピラミッドが辻博史

氏から上大迫秀作氏に、伊藤忠飼料ピラミッドの委員が鈴木育美氏から渡辺秀樹氏に、それぞれ交代いたしました。

● ホームページがリニューアル!

協会ホームページがリニューアルいたしました。携帯からの閲覧も見やすくなりました。遅ればせながらツイッターも始めております。ぜひご覧ください。

<http://www.j-spf.com/>

プロのシェフおすすめ、カンタン、おいしいSPFポークレシピ



SPFポークの さっぱり煮込み

●レシピ提供・matsu

オーナーシェフ 松浦真己 (北海道函館市)

SPFポークと香味野菜を使ったさっぱりした煮込み料理を教えてくださいました。塩と砂糖を使ってマリネするのがポイントのようです。たっぷりの豚肉で暑さに負けないスタミナをつけましょう。

●材料● (2人分)

- ・ SPFポークバラブロック 400g
- ・ たまねぎ 1個
- ・ セロリ 3cm長さ3本
- ・ にんじん 4分の1本 1cmの輪切り
- ・ 長ネギ(白い部分) 4cm長さ3本
- ・ タイム 4、5本
- ・ ローリエ 1枚
- ・ チキンブイヨン 1ℓ
- ・ トマトペースト 大さじ2
- ・ 塩 大さじ3と仕上げに適量
- ・ グラニュー糖 大さじ1
- ・ こしょう 適量

●つくり方●

- ① 豚肉は3cm角にカットします。塩とグラニュー糖をすり込み、1日冷蔵庫に入れてマリネします。
- ② ①の水分をふき取り火にかけ、弱火から中火で、脂を落とすイメージで表面に焼き色を付けます。
- ③ 別鍋に入れ、ブイヨンを注ぎます。火にかけてあくをとり、他の材料をすべて入れます。
- ④ 再び煮立たせ、あくをとりながら、弱火で1時間ほど煮込みます。
- ⑤ 塩、こしょうで味を調べて、完成です。

★松浦シェフからのアドバイス

脂身が苦手な方は表面の脂を少し包丁で削ってもOK。煮込み料理なので時間が経つとおいしくなります。1日おいてから食べていただきたいです。

認定情報

●平成30年6月認定農場

(有効期間：2017年6月7日から2018年6月末日まで)

北海道・鈴木ビッドファーム、青木ビッグファーム(株)、(有)フロイデ農場、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚場、FVファーム、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、(有)篠崎畜産、群馬県・JA東日本くみあい飼料(株)利根スワインセンター、利根沼田ドリームファーム(株)、(株)畜産経営研究所前橋農場、千葉県・江波戸SPF農場、高橋幸雄養豚場繁殖農場、同肥育農場、(有)ピギー・ジョイ第1農場、木内養豚第1農場、同第2農場、石毛宏司養豚場、塚本利昭養豚場、宮澤泰徳

養豚場、吉田道養豚場、岡山県・岡山JA畜産(株)荒戸山SPF農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、愛媛県・富永養豚、(株)多田ファーム、JA西日本くみあい飼料(株)愛媛養豚実証農場伊予スワインガーデン、(株)多田ファーム天貢農場、佐賀県・JAさが天山ファーム、長崎県・(株)伊藤ファーム、濱田養豚、JA全農長崎県本部五島種豚供給センター、宮崎県・(有)レクスト繁殖農場、同肥育農場、ジャパンミート(株)川南農場、ジャパンミート(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場、(有)さつま農場、(株)かいたく大口農場(以上40農場) ※次回認定委員会は平成30年9月6日(木)の予定



日浅順一さん
(北海道森町)

農場あつてのSPFポーク専門店 「ひこま豚」で生販一体のブランド展開



日浅順一さん(44歳)は北海道のSPF養豚の草分け的農場「(有)道南アグロ」(北海道森町)の2代目。農場経営のかたわら、SPF豚肉専門店勤務の経験を活かし、農場直営の販売店・レストラン経営にも取り組んでいます。

順一さんは神奈川県横浜生まれ。全農職員の父・文男さんの転勤に伴い茨城、北海道、東京と移り住みます。中学3年生の夏休み、突然勤めを辞め北海道でSPF養豚に取り組むことにした文男さん(協会だより14号で紹介)に連れられ北海道に。「意味がわからなかった。学校の友達に別れの挨拶もできなかったんですよ(笑)」。

札幌の高校ではテニスに打ち込みます。その理由は「勝ち進めば、試合のある日曜日に農場の手伝いをしなくてすむから。」(順一さん)。結果道大会まで出場を果たしました。

卒業後はアメリカでの語学留学を経て大学へ。勤めを経て農場に。なじめず我慢の限界だった頃、道南アグロ産豚肉専門のレストラン「いのこ家」1号店が札幌市にオープンしたのを機に、飲食の世界へ飛び込みます。

実は飲食業界は嫌いで学生時代のアルバイトでも避けていたとか。SPF豚専門店であるいのこ家は、順一さんのイメージをくつがえすものだったようです。素材のよさをアピールし、来店客に満足してもらえる店づくりに打ち込みます。札幌に続き、函館、仙台、東京と店舗拡大、営業マネー

ジャーとして各店舗を回り多忙な日々を送りました。

12年間勤めたのち、再び道南アグロに入社。近隣の養豚生産者の青年部メンバーとの交流を深めていく中「みんな若くて養豚に情熱をもって取り組んでいる。こんないい世界だったんだ。もっと早く帰ってくればよかった」と思えるようになったそうです。

一方で、いのこ家時代に培った飲食業界とのつながりで道南アグロ産SPFポークを必要としてくれる人がいたこともあって、5年前に販売会社「ひこま豚」を設立、農場直売店「ひこま豚食堂&ファーマーズショップ」を農場近くの森町にオープンさせました。その後2年前に「ひこま豚食堂&精肉店 Boo deli」を札幌に、さらに昨年11月、同じく札幌にひこま豚専門レストラン「ひこま豚食堂&酒場 Piggy Boo」もオープン。生販どちらに軸足を?と聞くと「農場あつての店舗です」ときっぱり。豚舎の改築にも着手、増頭も視野に入れていきます。森町に拠点を置き、11人の農場スタッフを信頼し札幌と行き来しながら生産・販売共に情熱を注いでいます。

5月29日、「にくの日」に長男凜汰朗くんが誕生したばかり。お風呂に入れるのが日課だそうです。

経営者として、父親として、その責任を果たす覚悟が、にこやかな表情の奥からはっきり伝わりました。

編集後記

大阪北部地震では大都市直下型地震の恐ろしさが現実のものとなりました。一日も早い復旧をお祈りします。日本の食卓では「肉食化」「調理食品化」「コメ離れ」が鮮明になっているとか。過去10年間で肉類・調理食品は2割近い伸びを示しています。「手軽さ」「安心」「値ごろ感」などがキーワードでしょう。肉食の時流にSPFポークをどう乗せるか。焦点を絞るのは難しいですが「三人寄れば文殊の知恵」、力を合わせて粘り強く活動展開したいものです。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第72号 2018年7月1日発行(季刊)
発行 〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail:j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀